



虹色の真珠



ウェルギルの旅

中村友映

第一部

第一部

西暦1600年頃のことだった。エピステーメンの町の沖合に大きな帆船がやって来て、男達が海へ潜り海底に神殿の遺跡を見つけると祭壇の宝石や門柱の真珠を持ち去っていった。真珠は美しい虹色に光った。

時は巡り西暦2009年春のエピステーメンの町は人の姿も少なくひっそりとしていた。町を流れる川の小径を登っていくとアガートン学院がある。

ウェルギルは学院の実験室から海を見下ろして思っていた。世界は広大で知らないことがたくさんある。今日もまた夕日が東の間に沈んでいく。この二年間は時がたつのがとても速かった。

ウェルギルは学院で寄宿舎生活を送る高等部の二年生である。美化委員の毎日の公務をしっかりとこなし、放課後には実験室に残って時空制御装置に没頭していた。

エクセリクシー先生が教室へ入って来て「ウェルギル君。研究は進んでいるかな？わたしは誇りに思っているよ。時空制御装置の完成はもうじきですね」

エクセリクシー先生はいつも優しく気遣ってくれた。四年前に両親を亡くしたウェルギルは紳士的で温厚なエクセリクシー先生をととても慕っていた。ウェルギルが学院に入学してほどなく赴任したのだった。

エクセリクシー先生は目に涙を溜めて手には人魚姫の絵本を持っていた。

「どうしたのですか先生？」

「天国へ上がっていく人魚姫に感動していたのですよ。私はいつも人魚姫の物語を心の中に大切にしているのです。私も人魚姫のように天国へ暮らしたいと願っているのです」

ウェルギルは人魚姫に涙するエクセリクシー先生を微笑ましいと思った。

「ウェルギル君はご両親を亡くされてずっと悲しい想いをしているのですね。もう二度と誰も死ぬことのない世界を作りたい。よく分かりますよ。その気持ちは」

「ええ。時空制御装置で決して死ぬことのない永遠の世界を作るのです。悲しい想いはもうしたくない。装置の誤差データをできる限り減らせば完成です」

「じゃまをしてはいけないね。わたしはこれから科学連の会合へ行くところなのだよ。学院をしばらく留守にします。楽しみにしているよ」と時空制御装置を見てエクセリクシー先生は目を細めていた。

実験室でいつものようにデータ計測をしているとドアが突然開いてウェルギルに声を掛ける者があった。

「ウェルギル。わたしの名はカミエル・ゲムナイオンだ。私と一緒に壁画巡りの冒険の旅に出るんだ。君を迎えに来た」

カミエル・ゲムナイオンとは変わった名前だ。女のように端正で息を呑む美しさに、流麗な長い御髪、しなやかな細い指、それに貴族みたいに匂いやかで、威厳と存在感に溢れている……でもいきなり何なのはこの人は。失礼じゃないか。

「いやですよ。壁画巡りの冒険なんて危険なことは。実験室からは出たくないんです。研究が何よりも好きなんですよ……どうして僕の名前を知っているんです？」

「ウェルギル。君が超科学クラブで時空制御装置を研究してると聞いてきた。君の研究が是非とも必要なのだよ」

ウェルギルはポケットから全国科学連盟の会員証を出して見せ「お断りします。忙しいんだ。科学連の合同研究もあるんですよ。旅なんてしてる時間はありません」と言ってから時空制御装置へボールペンをセットした。

「ボールペンの存在する空間、すなわち場を一時的に制御してみせましょう」

装置のスイッチを入れるとボールペンの姿が薄れて見えなくなり、再びスイッチを切るとボールペンが顕れた。時空制御装置は両腕に一抱えほどの大きさだった。

「どうです驚いたでしょうカミエル・ゲムナイオンさん。ボールペンは無くなったわけではないんですよ。ちゃんとこの場に存在していたんです」

カミエル・ゲムナイオンは頷きながらウェルギルの肩に優しく両手を置いて「本当に素晴らしい。触ってみてよいか？」

「だめです。素人に扱えるものじゃないんですよ」と身体で装置を静かに遮った。

両手を大きく広げて肩を竦め「手厳しいな。まあ今日は無理なようだ。君は実験室に閉じこもってばかりでは良くないでしょう？いずれ旅へ出ることになるだろう。また迎えに来る」

花の香りが残った。エレガントで気高い濃厚なバラの香りがうっとりする程に甘美だった。

学院の近くに黄色くて高い壁に囲われたメンブラン城があった。ダイニングテーブルに盛られた色とりどりのフルーツをカナリー姫が朝食前に食べていた。爽やかなシトラスの芳香や瑞々しいベリーの甘酸っぱさを愛でながら悲しい目をしていた。

コック長が「カナリー姫様。お朝食の前にはお控えなされた方が……」

「ピーリアはないの？採ってきてちょうだい。今のわたくしはとってもとってもフルーツが食べたい気持ちなのよ、分かる？」

「春にはピーリアは生ってはおりません。グールンの実ではいかがですか？」

「ふざけないでちょうだい！わたくしはピーリアが食べたいの。超金属のフォルテンで春から夏へ変えてしまえばよいではないですか」

「自然の秩序を乱してはなりません。それに超金属フォルテンはルーチェン様でないと扱えるものではございませんです」

「……ルーチェンなんて行方不明じゃないの。いいえわたくしから逃げ隠れしているんだわ。こんな気持ちになるのもみいんなルーチェンのせいよ！」とカナリー姫はしくしく泣き出して、持っていた真っ赤なベリーを窓へ投げつけた。

学院から続く小高い丘を渡っていたウェルギルは、門衛に挨拶してメンブラン城へ入って行った。学院で研究栽培しているカリュオーンの木の実を届けに来たのだった。

庭園の片隅で泣いていたカナリー姫はウェルギルを見つけると近寄って「あなた誰？学院の人ね。賢そうなものすぐ分かる。ねえ聞いて、ルーチェンなのよ、超金属フォルテンで時空を歪めたのは。ルーチェンが時空を曲げたから、わたくしの愛おしい人トランクイリーテが消えてしまったのよ。騎馬弓団の団長だったの」

「なるほど。歪んだ時空間に取り込まれると、今この時この場所とは異なった時間、空間に連れ去られてしまうんです。消えてしまった訳ではありませんよ」

「生きているのね？トランクイリーテは！」

「時空を本来に正せばトランクイリーテさんは戻って来ますよ」

「連れ戻してちょうだい。あなたなら出来るわ！」

「よけいな面倒には関わりたくないな」

「・・・ねえあなたさっきから、わたくしの胸を見ていたでしょう？男の人はみいんなそう」

フリルの襟元から溢れんばかりの胸をしたカナリー姫はウェルギルと同じ年頃と見えた。泣いた涙はもう乾いていた。

「研究しか頭がないんだ」

「嘘。ばつとしてわたくしのお部屋を片づけてちょうだい」

ウェルギルが逃げようとする「だめよいらっしゃい！」と手を引いて城の中へ連れて行った。

とても広いカナリー姫の部屋は足の踏み場がない程に散らかっていた。たくさんのドレスやお人形、双眼鏡、弓矢まで転がっていた。壁には弓の的が下がっていて、五本の矢は全て真ん中を射貫いていていた。鳥かごのオウムが「帰って来て帰って来て」と繰り返した。

ウェルギルは二年ぶりにエピステーメンの町へ出た。どこの商店も扉が閉ざされていた。書店の扉を叩くと出てきたのはしばらく会わないうちに、ずいぶんと老け込んだ主人だった。

「もう二十年もたったからねえ。ウェルギル元気だったかい？」

「二年前ですよ本屋のご主人さん。僕が学院に入学した時ですから」

書店の主人はおかしなことを言っているなとは思ったけれどウェルギルは「『時空場の形成理論』を注文したいんだ」

「明日には入荷するはずだ。代金は先に貰っておくよ」

「ずいぶんと早く届くんですね」

「ああ速いもんだよ、毎日があつと言う間に過ぎちまう。うちのかみさんも十年前に逝っちゃった。つい昨日のここのようだ」と書店の主人は肩を落とした。

「・・・二年前に僕が来たときはお店に奥さんも一緒だったじゃないですか?!」

エピステーメンの町は時が速く進んででもいるのであろうかとウェルギルは不審に思った。

ウェルギルは唯一の肉親である姉に会うために列車で二時間ほどの町エミナールを訪ねた。一つ違いの姉は両親の残してくれた大きな屋敷に一人で住んでいた。

ウェルギルは姉のエウテキアを見て驚いた。五つしか違わない姉はずいぶんと大人びてしまっていた。

「元気でしたか姉さん。宝石商の仕事は上手くいっていますか？」

「ウェルギルほんとに懐かしいわ。あなたが学院に入学してから二十年がたったのですから」

ウェルギルは怪しんだ。ここでも時が速く進んでいるのであろうか。カレンダーはまさしく二十年後の2029年だった。ウェルギルは確かめたくなった。

携帯時空制御装置をポケットから出して、場の時間の流れを計測すると針が通常の十倍の値を示した。時が十倍の速さで流れていることを意味していた。紛れもなく時が歪んでいた。

「ウェルギル何を驚いているの？あなたはいつまでたっても子供のままね。秘宝が手に入ったのよ。待ってて」

姉のエウテキアは宝石箱を持って戻ると「虹色の真珠”って言うの」と親指程もある真珠を出して見せた。ペンダントに仕立ててあった。

「七色に光るでしょ。とっても綺麗。かけてあげる。私からのプレゼント」

ウェルギルは宝石などには関心は無く、十倍の時の流れのことで頭がいっぱいだった。本屋の奥さんは一年で十年分が過ぎて亡くなってしまった。このままでは五年、六年もしないうちに姉の寿命が尽きてしまうのではないかとウェルギルは危ぶんだ。

学院にモルソイ・ラヴィが転校してきた。少女にも見えるし大人にも見える不思議な生徒で、学力テストで常にトップのウェルギルを抜いて一番になった。モルソイ・ラヴィは壁画巡りの冒険クラブを作った。

「ウェルギルさん、壁画巡りの冒険クラブに入りませんか？まだわたくしだけなの。世界の時空が歪んでいるのです。秘密を突き止めに旅に出るんです」

モルソイ・ラヴィは真珠のネックレスに薄紅の髪飾りをしていた。物腰静かにゆったりと構えていた。

「どうして時空の歪みのことを知っているんです？僕も気づいていたんですよ。時が十倍の速さで進んでいるんです。この町や遠くの町までもが一日で十日、一年で十年が過ぎているんです」

「いいえ、世界中です。世界の時間が歪んでいるんです。学院にあるあなたの時空制御装置の影響で、学院や周囲の時間だけが正常なのです。一緒に旅に出ましょう」

「時空制御装置を持って行きましょう。少し重いけれどリュックで担いでいける。ただ事じゃないです」

振り返るとカミエル・ゲムナイオンが「明日の早朝に出発だ。今日はゆっくり休むのが良いでしょう」と片笑んでいた。

第二部

第二部

ウェルギルはカミエル・ゲムナイオンとモルソイ・ラヴィに連れ立ってミネオンの町を目指して旅をしていた。麗らかな春の野道を歩いていった。ウェルギルは重たい時空制御装置をリュックに背負っていた。

モルソイ・ラヴィが「カミエル。持ってあげたらどうですか？大人ばかりが楽をしてはいけません。ウェルギルさんが大変そうです」

「私は重たいのは苦手ですよ。悪いが遠慮させてもらいたい」

「しかたがありませんね。わたくしが背負ってあげます。カミエル。ライアーを持っていてください」と腕に抱いていた豎琴を手渡すと弦が弾けて音を立てた。

ウェルギルは息が上がってしまって、リュックを下ろしてから道へヘタリ込んだ。

モルソイ・ラヴィはリュックを担ぎ上げようとして「ああ重たい・・・なんて重たいんでしょう」

カミエル・ゲムナイオンは「装置を駆動して空間を制御できないのか？軽くすることぐらいできるでしょう？」

「バッテリーが無くなってしまいますよ。長時間は無理です。少し休んでから僕が担いで行きますから」

三人は春山に腰を下ろした。芽吹いた木の実や草萌えで山は薄緑に色づいていた。若草に天道虫が止まっていた。モルソイ・ラヴィは小川の清水を両手で掬って飲むと「冷たくてとてもおいしいです。ウェルギルさんも飲んだらどうでしょう？」

「自然の水はイオンが豊富ですから元気になれそうですね」とウェルギルは川辺で身を乗り出すと、足を滑らせて川へ落ちた。小川は浅瀬でウェルギルはズボンを濡らしただけだった。

さやさやと小川が行き、風が光り空で雲雀がさえずっていた。モルソイ・ラヴィの豎琴の調べは天まで昇った。

ミネオンの町が見えてきた。岩ばかりの荒涼とした町で人が住んでいる気配が少しもなかった。

「おかしい町ですね。至る所に大きな黒い鳥がいます」とウェルギルは辺りを見回した。

カラスのような大きな黒い鳥がウェルギル達へ集まってきた。二百羽、三百羽もの鳥で空が暗くなるほどだった。上空で群れながら旋回していると、次々と地上へ向かって降りてきて、数十羽の黒い鳥がウェルギルを掴んで空へ上がって行った。必死に声をあげてウェルギルは抵抗した。

「ウェルギルさんがたいへん！カミエル。助けてあげてください」

カミエル・ゲムナイオンは「まとめて片づけないと面倒だ。私の法術なら造作もない」と空を見上げると、黒い鳥達がばたばたと地面に落ちてきて黒い鳥で地が埋め尽くされたようだった。

ウェルギルがふんわりと空から降りてくるとシャツは破けて穴だらけだった。

「壁画は橋を渡った向こうの岩肌でしたね」とモルソイ・ラヴィは切り立った岩山へ歩きだした。

カミエル・ゲムナイオンは「さて壁画へ行きましょう。ルーチェンと私達は世界各地を旅して七つの壁画を描いたのですが、ルーチェンが壁画を描いた理由は分からないのです。七つの壁画の他は何も知らない」

「ルーチェンって時空を操作したって言う・・・ルーチェンが時空を歪めたから恋人が消えてしまったと泣いていたお姫様がいました」

「・・・どうしたものか。時空の歪みを解かなくては話にならん。とにかく七つの壁画を辿ることです」

切り立った岩肌を平らに削り落として描かれていた壁画は炎のように真っ赤な夕日だった。

ウェルギルは壁画に近寄り、手で触れて確かめながら撫でてしていると壁画が淡い光を放ち始めた。

ウェルギルは目を輝かせて「ただの塗料ではないですよ。クローマの岩石を細かく砕いた岩絵の具ですね。滑らかで非常に岩石の粒子が細かく、しかも鋼鉄よりも堅いクローマの一つ一つの粒子が発色するんです。発色して映像を結ぶんです。映像と音声を石の粒子に記憶させておくこともできるんです」

壁画は映像を映し始めた。口をへの字に結んで太い眉を吊り上げ、大きく目を見開いた巨大人魚がルーチェンへ向かって火炎を吹きかけた。ルーチェンが七色の光を放って自分を包むと火炎は光の縁ではね飛ばされた。闘いの映像の後に慈愛に満ちた眼差しでルーチェンが語った。

『わたしを助け出してください。あなたでなければできません。』

「いったいルーチェンはどうしたのでしょうか。そういえばカナリー姫も言っていました。ルーチェンは行方不明になっているって」

モルソイ・ラヴィは「わたくしにも分からないのです。わたくし達と世界を旅して七つの壁画を描いた後、ルーチェンは姿を消してしまったのです。助け出してくださいだなんて。どうしたのルーチェン・・・」

ウェルギルは「ああ重い」とリュックを下ろしてポケットから携帯時空制御装置を出して「計測してみましょう。場の時空の流れを調べてみます」

装置の針が最大を示すと「この壁画の時空エネルギーはとてつもなく大きい。もしかすると・・・」

ウェルギルが携帯時空制御装置のスイッチを入れると、壁画の時空場が変化して祭壇が顕れた。祭壇の台座の上に赤い真珠が置かれていて、淡く透明な赤い光を放っていた。

「七色の真珠の一つですね。見たことがあります。遙か昔のことですが・・・」とモルソイ・ラヴィは感慨深げに赤い真珠を見つめた。

カミエル・ゲムナイオンは「さあ急ごうか。あと六つの町を辿らねばなりません」と壁画を後にして歩き始めた。

ウェルギルは小指程の小さな赤い真珠をそっと摘んでリュックのポケットへしまった。ウェル

ギル達が町を出ると二百羽、三百羽の黒い鳥が起き上がって空へ飛んでいった。

ウェルギル達は旅を続け、二つ目の町で橙色の真珠を見つけた。三つ目の町で黄色、四つ目の町で緑色の真珠を手に入れた。

大陸横断鉄道に乗って二日目の朝が来た。五つ目の町カティエールは連峰を背にしたのどかな町だった。大きな川に渡し船が待っていて、ウェルギル達に船頭が声をかけた。

「三人分だね？90ベルネール頂くよ。高いって自分で川中に行くもんがいるけど、激流の渦に巻かれちまって助かんないのを幾つも見ただ。あんた達は止めときなよ」

「私が払いましょう。釣り銭はとっておきなさい」とカミエル・ゲムナイオンは100ベルネール渡して「気をつけて乗りなさい」とモルソイ・ラヴィの手を引いて船へ乗せてから「ウェルギルもだ」と手を掴んだ。

船は広い川の真ん中で流れに揉まれながら渡っていった。よくもこんな流れを泳いで渡ろうとしたものかと、ウェルギルは激流をのぞき込んだ。船頭は鼻歌まじりに漕いでいった。船が栈橋に到着すると船頭は「この町は勝負に負けてるようじゃ、よそもんは生きて出られないよ。勝って勝って勝ちまくるようじゃないとな」

モルソイ・ラヴィは町を見渡しながら「五つ目の壁画は人々の集まる向こうの広場です」

町の入り口に重たい鉄の扉が閉まっていた。守衛が小屋から出て来て「町へ入るのか？覚悟はできてるんだな？」とカティエール入出証を三人へ配った。

「感じが悪いですね。カティエール入出証を渡しながらほくそ笑んでいましたよ。嫌な予感がするなあ」とウェルギルは不安になり「何かあるか調べてから町へ行きませんか？」

「もう町に入ってしまった。向かうしかないでしょう。心配はいらん」とカミエル・ゲムナイオンは町へずんずんと進んで行った。

カティエールの町の中心街は綺麗に整備されていた。道路は高架になっていて車は中心街を避けて行き来し、歩道も並木も美しく、往来にはカフェが出て人々が集っていた。

見上げるほど巨大な黄金の神像が町の本通りに建っていた。黄金の神は両手に金銀財宝を抱えて銀の鯨にまたがり口をへの字に結んで太い眉を吊り上げ、大きく見開いた力強い眼で天を見上げていた。

モルソイ・ラヴィは「カティエールの町はずいぶんとお金をかけているのですね。いったいどこから収入を得ているのでしょうか」

「何かからくりがありそうですよ。黄金の像を三つも見ました。大変な額になるはずですよ。こんなにも黄金の像にお金をかける意味は何なのでしょうかね？」とウェルギルは怪しんだ。

「銀の鯨を従えて金銀財宝を手にする黄金の神か。まさかとは思いますが」とカミエル・ゲムナイオンは黄金の像を睨んだ。

モルソイ・ラヴィの言うとおりの町の広場に壁画が描かれていて、人の背と変わらぬ程の大きさで瑠璃色の海が描かれていた。壁画の背後には黄金の神像がここにも聳えていた。

「ルーチェンの壁画です。こんなところにも黄金の神像が・・・」とモルソイ・ラヴィは見上

げた。

瑠璃色の壁画からは青い真珠が見つかった。

三人が町を出ようとする「待ちなさい。カティエール入出証を出して」と町の出口で守衛に止められた。入出証を見せると「町を出す訳にはいかないな。町を出るには滞在町料として一人十万ベルネール支払う必要がある。支払い済みの印が押してない」

「一人十万ベルネールなどとは法外な。そこをどけ！」とカミエル・ゲムナイオンが守衛をはねのけて門をくぐろうとすると警備兵三名に取り押さえられた。

「カミエル逆らってはいけませんよ。従いましょう。でも合計三十万ベルネールのお金なんてどうでしょうか」

守衛はしたり顔で「プレイセンターパイディアルでお金を増やせばいいんだ。簡単なもんさ。見えるだろ向こうに？真っ赤な建物だ」

派手な赤色のプレイセンターパイディアルへ入ると大きな絵札ホームルがたくさん並んでいて、人々は絵札ホームルを前に熱中していた。

「またやられた」

「負けちゃった」などと至る所でざわめきが起きていた。

「これだな。お金を増やすと言うのは」とカミエル・ゲムナイオンは有り金全てで絵札ホームルのプレイコインを買った。両手にぎゅぐゅとコインを持って絵札ホームルの前にどしりと座った。コインを入れてボタンを押すと七つの絵札が次々と降りて来て、左から順番に魚の絵が並んでいった。全て魚なら当たりで、コインは十倍に増えて出てくるはずだった。

最後の一枚の絵が降りてきて黄金の神が出た。カミエル・ゲムナイオンは悔しそうにして絵札ホームルを続けたが最後には必ず黄金の神が出て負けてしまった。有り金全てを失ってしまった。

「なんていうことだ負けてしまった。私の法術を使えば造作もないんだが、こんなおもちゃに使う気にはならん」

絵札ホームルを調べていたウェルギルは「細工があるはずですよ。いんちきです。勝てるはずありません」

「そうゆうことだったのですね。カティエールの町がお金持ちなのは」

ウェルギルが絵札ホームルをいじっていると「これを使いなさい」と突然小さな金属の棒を差し出す女性があった。髪は短いクールなひとでさっぱりと男っぽさのある細身な女性だったが、母性的なやさしさもあった。

ウェルギルが女性に振り向くと「その超金属フォルテンを絵札ホームルの絵札にかざして、出したい絵札を念じればよいのだ。そなたの意念通りに出てくれるぞ」

モルソイ・ラヴィは「マーレイ。来てたのですね。お久しぶりです。二年ぶりですね？」

「人間界にも久しく訪れてなかったでな。モルソイ・ラヴィ。この少年がウェルギルだな？」とウェルギルに握手を求めて「人間界では初めての者の手を握るのだったな。これでよいか？」

「痛あ。マーレイさん・・・」

ウェルギルは力強い握手に思わず声を上げた。

「すまぬ。もう少し優しくせんとならんのだな」

コインを入れてウェルギルは次々と絵札ホームルのボタンを押して、フォルテンで思い通りの絵札を揃えていった。

「もうフォルテンを使いこなしおるわ。ははは」とマーレイは静かに笑った。

ウェルギルは持ちきれないほどのコインを絵札ホームルに吐き出させると、大きなカゴへ10杯分にもなった。お金の交換すると千五百五十万ベルネールだった。一行は滞在町料を四人分四十万ベルネール支払ってカティエールの町を出た。

カティエールでは騒ぎが起こっていた。プレイセンターパイディアールの責任者がカティエールの町長に怒られていた。

「千五百五十万ベルネールも巻き上げられてどうするんだ。取り返してこい！」

剣を持った百人の警備兵を引き連れて、プレイセンターパイディアールの女責任者はウェルギル達を追った。

一行が六つ目のプロテュモスの町に到着すると、町の中から大きな歓声や叫び声が聞こえていた。人々は飲み、食い、踊り、騒いで仮装行列や美女や動物のパレード、陽気なお祭り騒ぎのカーニバルが興じられ、町は熱狂に包まれていた。

ウェルギルが「凄い騒ぎですね。頭が痛くなりそうですよ。六つ目の壁画はどこですか？」

「確か向こうの噴水広場だったと思うのですが・・・この人出と行列ではどうやって渡っていったら良いのでしょうか」とモルソイ・ラヴィは困り顔だった。

カミエル・ゲムナイオンは人の波をかき分けながら「パレードの列に加わって噴水広場へたどり着くしかないでしょう。しかしパレードなどとは私の性分じゃありませんけどね」

衣装屋へ入るとウェルギルは白衣の科学者で、モルソイ・ラヴィは猫の衣装を、カミエル・ゲムナイオンは虎の格好をした。マーレイは熊の着ぐるみを着た。

パレードの列へ加わりとうると町のパレード実行役員がやってきて「パレード参加料をいただくよ。一人二十万ベルネール、四人で八十万だ」

パイディアールで増やしたお金を布袋から出して、カミエル・ゲムナイオンは八十万ベルネール支払った。

四人はパレードの列へ加わって、行列に揉まれながら噴水広場を目指した。

プレイセンターパイディアールの女責任者ピールは剣を持った百人の警備兵達を引き連れてプロテュモスの町に入ってきた。物々しい数の警備兵達がパレードの行列を押し退けて進んで行った。

噴水広場へ辿り着いてモルソイ・ラヴィは「ウェルギルがいないですよ。白衣を着ているはずですけど」

「行列に紛れて分からなくなってしまったか？しばらく待っていてみようかの」とマーレイはのんきに構えていた。

ウェルギルは行列にもみくちゃにされ、ぐったりと疲れていた。噴水広場が分からなくなり、途方に暮れて木陰に休んでいた。

酒を飲んで踊り狂い、笑い叫んでいるたくさんの女達が出て来た。白衣のウェルギルが女達に「噴水広場はどちらでしょうか？」と尋ねた。女達は笑い声を上げながら踊り近づいて来た。「やめてくれ、何するんだ！」

ウェルギルは女達にかつぎ上げられて連れ去られて行った。

「降ろしてくれ！」

岸壁まで来ると女達は歓声を上げてウェルギルを海へ投げ捨てた。

仮装衣装を脱いで噴水前のカフェ・テーブルでカミエル・ゲムナイオン達が休んでいた。剣を持った百人の警備兵達を取り囲んだ。

プレイセーターパイディアールの女責任者ピールは「千五百五十万ベルネールを返してもらおうか。私は怒られたんだよ、あんた達のお陰で。インチキしたに決まってるんだ。儲かるはずないんだからね」

カミエル・ゲムナイオンは「黙りなさい。儲かるはずがないとは聞き捨てなりませんね」

先頭の警備兵達がカミエル・ゲムナイオンに次々と剣を振り降ろして襲い掛かって来た。カミエル・ゲムナイオンは身動きすることもなく目を閉じていた。振り降ろされたはずの剣が消えていた。あっけにとられた警備兵達が手に握った剣に目をやると刀身が溶けてなくなっていた。

カミエル・ゲムナイオンは「もう帰った方が良いのではありませんか？無駄ですよ。私を倒そうとしたって。他人に傷つけられるのは我慢なりませんからね」

残りの警備兵達は今度はモルソイ・ラヴィへ襲いかかった。モルソイ・ラヴィは身を翻し、剣を奪い取って応戦した。襲い来る切っ先を次々と剣ではじき飛ばして、一人の兵の喉元間際で剣を止めると「おやめなさい。わたくしはあなた方の相手ではありません」

パイディアールの女責任者ピールは「お願いだから返してくれないかい。わたしも兵達もどんな目に遭わされるかわからない」と泣き出した。

カミエル・ゲムナイオンは「私の百万ベルネールは返してもらいますよ。それに法外なパレード参加料も払う気にはならん」と残り全てはパイディアールの女責任者ピールへ返してやった。兵達は安堵の表情をして帰って行った。マーレイはハチミツ・ツイトローブティーを悠々と楽しんでた。

海へ沈んでいくウェルギルはポケットへ手を入れ携帯時空制御装置を掴んでスイッチをオンにすると、ウェルギルを取り巻いている海の水が渦を巻いて消えていった。

凄い威力だ。海の中でも実証できたのだ。海の底にいるなんて、とウェルギルは感慨無量だった。

ウェルギルの空間場だけが水のない空間場が変わっていた。海の底を歩いて海岸へ上陸した。

びしょ濡れのウェルギルが噴水広場へ着くとマーレイは「どうしたウェルギル？濡れているではないか」と三杯目のハチミツ・ツイトローブティーを飲みながら聞いた。

「ちょっと海の底を散歩してきたんです。なかなかできない経験でしたよ」とウェルギルは自信に満ちていた。

六つ目の壁画で藍色の真珠を見つけてウェルギル達はプロテュモスの町を出た。カーニバルの仮装で入賞したというので、一行はバスに乗せられて最後の町ヘッドネイに到着した。

ヘッドネイの町は薄暗い森の中にあった。町全体が遊園地になっていた。どこまで行っても広大で所々に観覧車やジェットコースター、メリーゴーランド、人形屋敷、龍宮城、お菓子の家などがあつた。

モルソイ・ラヴィは「七つ目の壁画はお菓子の家の前でしたね。ほら見えてきました」

お菓子の家の前に立っている紳士が優しげに微笑んでウェルギル達が来るのを迎えた。

「エクセリクシー先生！どうしてこんなところへ？驚きましたよ」

「ウェルギル君。とうとう来たのですね。来ると思っていました。時空制御装置が完成しましたからね。カミエル・ゲムナイオンにモルソイ・ラヴィ。マーレイまで一緒ですか。みなさんお帰りになった方がよいですよ」

「エクセリクシー先生。言っていることが分かりません。僕は世界の時空の歪みを正す為にみんなと旅をして来たのです」とウェルギルは悲しそうにした。

「それがいけないですよ。私は世界の時間を十倍の速さで進めて、神に進化しようとしているんです。私の町を神にふさわしい美しい天国にするんです」

人魚姫の物語りに涙して天国へ暮らしたいと言っていたエクセリクシー先生をウェルギルは思い出した。

「私は先生なんかではなかったんですよ。邪魔しないでください・・・帰れと言っているのが分からないのか！」

エクセリクシー先生は突如姿を変えた。口をへの字に結んで太い眉を吊り上げ、大きく目を見開いた巨大人魚に変わった。上半身が人の姿で長く太い魚の尾ひれをしていた。

カミエル・ゲムナイオンは「深海の王、巨大人魚ゴーレン。世界の時空を歪めて時間を進め、永遠の寿命を持つ自分だけが神に進化しようと思論んだ。時空を元へ戻せ！」

「カミエル・ゲムナイオン。お前こそ天界へ帰れ。邪魔をするな！」と木の上へ舞い昇った。

木の上のゴーレンがウェルギルへ火炎をぶつけたので、とっさにウェルギルは避けたが破れて穴だらけのシャツの裾が燃え上がった。ウェルギルはあわてて火を叩き消した。

逃げようとするモルソイ・ラヴィを見つけたゴーレンは火炎を吐いた。モルソイ・ラヴィがお菓子の家へ隠れると、お菓子の家は火炎を吹き付けられて燃え上がったので、モルソイ・ラヴィは逃げ場を失い炎の中で立ち往生していた。

ウェルギルは「モルソイ・ラヴィ！」と燃え盛るお菓子の家へ飛び込んでから携帯時空制御装置をオンにして炎の壁へ突入し、モルソイ・ラヴィを背負った。二人の空間だけは燃えてはいなかった。ウェルギルは炎のトンネルを脱出した。

第三部

第三部

梢のゴーレンが火の雨を森へ降らせて空へ昇ると火が燃え広がっていった。マーレイが大雨を降らせると森に雨音が激しく響き、火は鎮まっていった。モルソイ・ラヴィは天空のゴーレンへ光の矢を放ったが、届く前にゴーレンが姿を隠したので光矢は弾けて消えた。

ゴーレンの姿が見えなくなり、辺りが静まり返って森のくすぶる音だけが聞こえていた。カミエル・ゲムナイオンは「時空に姿を晦ましたとみえる。どこにいるのだ!？」

ウェルギルがリュックから時空制御装置を出して「時空を操作します。五百メートル四方へ影響が及びます。ゴーレンが顕れるはずです」

空間が激しく揺らいで辺りの景色が薄らぎ森の時空場が変化した。辺りを見渡すとゴーレンはウェルギルのすぐ後ろに立っていてウェルギルを羽交い締めにした。

カミエル・ゲムナイオンは「ウェルギルを放せ!」

「私から離れる。ウェルギルがどうなってもよいのか!？」

カミエル・ゲムナイオン達が後ずさりするとゴーレンはウェルギルを突き放して「同じ気持ちで永遠を喜び合えると思っていたんですがね。残念ですよ」と倒れたウェルギルへ火炎を吹きかけた。ウェルギルは横へ転がって火炎を避けたがズボンが燃え立ったので、慌てて水たまりに飛び込んで火を消した。

ゴーレンが身構えるとウェルギルは「ゴーレンの思うようにはさせない!」と体当たりしていったが、ウェルギルとゴーレンは二人して森から姿を消した。

ウェルギルは暗闇の異空間へ連れ去られていた。何も見えない漆黒の中でゴーレンの声だけが「誰も助けには来ない。私の姿も見えないでしょう。さあどうする?私の火炎はもう避けられませんよ」

ウェルギルは意識を凝らしたが、ただ寂々とした闇の中でゴーレンの姿はおろか気配さえも分からなかった。真っ暗な中を逃げ惑いながら携帯時空制御装置に手をかけてウェルギルは闇から脱出しようとした。ゴーレンの炎が襲い来る前にもとの世界へ逃げ戻ろうとすると闇が赤く仄めき、強烈な炎がウェルギルへ向かって来た。もう避けようもなかった。

炎が届こうとした時シャツの下で虹色の真珠が光を放ち、ウェルギルは七色の光で包まれていた。火炎は虹色の光の縁で跳ね返ってゴーレンへ襲いかかり、闇に浮かんで燃え上がっていった。煌めく黄金のカギが残された。

ウェルギルは携帯時空制御装置を手にしてカミエル・ゲムナイオン達のいる森へ戻った。ウェルギルの頬に涙が伝っていた。

森の焼け跡に七つ目の壁画だけが遺っていて雨上がりの森に虹の架かる絵が描かれていた。ウェルギルが携帯時空制御装置で空間を開くと七つ目の紫色の真珠が見つかり、映像が浮かび始めた。

『メリーゴーランドに閉じ込められています。空間を解いて助け出してください』とルーチェンが訴えかけていた。

森の奥深くにメリーゴーランドはかろうじて燃え残っていた。マーレイが「メリーゴーランドの空間を開けばルーチェンが助け出せるのだな？」

ウェルギルは頷いて時空制御装置をセットした。

「メリーゴーランドの空間を開きますよ」

空間が激しく揺らぎながらメリーゴーランドが薄れていき、石室が顕れた。カミエル・ゲムナイオンとモルソイ・ラヴィ、マーレイが石室へ近寄って、三人で重たい石扉を引き開けようとしたがカギが掛かっていた。ゴーレンの残した黄金のカギで開けることができた。

石室の中にルーチェンが立っていた。カナリー姫の恋人トランクイリーテも一緒だった。モルソイ・ラヴィは「よかった。ルーチェン・・・」と歩み寄ってルーチェンを静かに抱いた。

ルーチェンは「深海の王ゴーレンの時空結界を防ごうとトランクイリーテさんと一緒に闘ったけれど、閉じ込められてしまったのです」と言ってから装置にしゃがんでいるウェルギルを見つけて「あなたですねウェルギル。私を見つけてくれたのは？私は毎日語りかけていたのです。いいえ壁画にはありません。ウェルギル、あなたにです」

「僕にですか？毎日実験ばかりしてたのですよ」

「そうです。実験が成功するように毎日あなたを導いていました。世界の時空の歪みを解く旅へ導いていたのです。七つ目の壁画に真珠をセットしましょう」

ルーチェンはウェルギル達が集めた七つの真珠を壁画へセットした。壁画が光を放ち始めたけれどルーチェンは「やっぱりだめでした。案じていた通りです。七つの真珠だけでは力が弱いのです。虹色の真珠が必要なのですが、昔のことです、四百年ほど前でした。海底の神殿の門柱から虹色の真珠が持ち去られてしまったのです。いろいろな人の手に渡りどこにあるのか分かりません」

「虹色の真珠って言うのはもしかしたら・・・」と破れて焼け焦げたシャツの下からウェルギルはペンダントを見せた。姉のエウテキアがくれた虹色の真珠のペンダントだった。

「そうですこれです！」

虹色の真珠は淡い七色を放って薄暗い森を明るく照らした。ルーチェンが虹色の真珠を壁画へセットするとまばゆい光を放ち始め、次第に光は強く大きくなって世界の七つの壁画と繋がった。虹色の光が世界に輝き渡って時空の歪みが解けた。

教会の鐘が鳴る。エピステーメンの町は川辺の町である。緑の川に小舟が浮かび、川沿いの小径には人々が行き交う。カナリー姫と恋人トランクイリーテが並んで歩いていた。町に平和な時間が戻った。

ウェルギルは放課後の校庭でクラスメイトたちのサッカーをケラソスの木にもたれて眺めていた。一人がウェルギルに駆け寄って誘うと「四年ぶりだなサッカーなんて・・・」とグラウンドへ出た。

ウェルギルにパスが渡った。ウェルギルが蹴ったボールは大きく弧を作りながらゴールポスト

をかすめて力強くゴールした。

ケラソスの木が風に吹かれた。散り逝くケラソスの白い花を見てウェルギルは美しいと思った。

終わり

1 エンディングに一つのエピソードを加えて更新しました。太字にした部分を追加しました。

2011年7月16日

<更新前>

教会の鐘が鳴る。エピステーメンの町は川辺の町だ。緑の川に小舟が浮かび、川沿いの小径には人々が行き交う。カナリー姫と恋人トランクイリーテが並んで歩いていた。町に平和な時間が戻った。風に散り逝くケラソスの白い花を見て、ウェルギルは美しいと思った。

終わり

<更新後>

教会の鐘が鳴る。エピステーメンの町は川辺の町だ。緑の川に小舟が浮かび、川沿いの小径には人々が行き交う。カナリー姫と恋人トランクイリーテが並んで歩いていた。町に平和な時間が戻った。

ウェルギルは放課後の校庭でクラスメイトたちのサッカーをケラソスの木にもたれて眺めていた。一人がウェルギルに駆け寄って誘うと「四年ぶりだなサッカーなんて・・・」とグラウンドへ出た。

ウェルギルにパスが渡った。ウェルギルが蹴ったボールは大きく弧を作りながらゴールポストをかすめて力強くゴールした。

ケラソスの木が風に吹かれた。ウェルギルは散り逝くケラソスの白い花を見て美しいと思った。

終わり

2 最後の三つの試練達成をそれぞれの試練が次の試練へとリンクする意味を持たせるようにして、部分を書き改めて更新しました。

すなわち、プレイセンターパイディアルでお金を増やせたから→参加料を払ってパレードに参加できた→パレードに参加したから入賞したと言われ→バスに乗せられて森の中の遊園地の町へ行くことができた→遊園地の町で深海の王ゴーレンを倒したから石室のカギを手に入れることができた→時空を開いて石室を出現させ石室のカギを開けてルーチェンを助け出せた
と物語が進展・展開するように部分を書き直しました。 2011年7月18日

虹色の真珠

<http://p.booklog.jp/book/30069>

著者：中村友映

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bl0160/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/30069>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/30069>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.